

富士の山を詠む歌一首 并せて短歌

三一九番

なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と
 こちごちの 国のみ中ゆ 出で立てる 富士の高
 嶺は 天雲も い行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛び
 も上らず 燃ゆる火を 雪もて消ち 降る雪を
 火もて消ちつつ 言ひも得ず 名付けも知らず
 くすしくも います神かも 石花の海と 名付け
 てあるも その山の 堤める海そ 富士川と 人
 の渡るも その山の 水の激ちそ 日本の大和
 の国の 鎮めとも います神かも 宝とも な
 れる山かも 駿河なる 富士の高嶺は 見れど飽
 かぬかも

反歌

三二〇番

富士の嶺に 降り置く雪は 六月の 十五日に消
 んれば その夜降りけり

三二一番

富士の嶺を 高み恐み 天雲も い行きはばかり
 たなびくものを